九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

第42回九州地区大学一般教育研究協議会議事録

https://doi.org/10.15017/20358

出版情報：九州地区大学一般教育研究協議会議事録. 42, 1994-08-19. 九州地区大学一般教育研究会
バージョン：
権利関係：

4. 各部会及び短期大学協議会報告

○ 人文・社会科学部会報告

〔座　長〕　　大分大学　助教授　船橋泰彦

本部会は、50人の出席があった。3つの熱のこもった報告がなされ、それに熱心な聴衆が参加するという、良い緊張感があった。

3報告の概要は次のようであった。

「一般教育としての『資本論』の授業について」（九州国際大学　三上禮次先生）は、授業の目標・教材・進め方から成績評価の仕方まで包括的に一般教育の授業を企画し、三上先生流に作り出された授業形態を紹介されたものであった。すなわち、無用の用を活用し、市民的人格形成に役立つよう、学生に「古典」を読むことを理解させる。資本論は「古典」であり、古典の読み方を教え得る教材である。最初から一行づつ解読する。ポイントの箇所にはアンダーラインを引かせ、それを試験に出すことを予告したりする。一年間で価値論の箇所を読み上げる。時折アンケートを取りながら出席をとる。試験にはテキスト持参。成績の算出に出席率を加味する。

報告に対し、教材選択、解読のあり方、試験方法などについて、質疑・討論が交わされた。しかし、報告の与えた圧倒的印象は、三上流一般教育論のあること、その教育論でもって誠実かつ熱心に授業実践がなされたことであった。

「学問の専門化と一般教育の役割――戦後の学問思想から学ぶ――」（別府大学　佐藤瑠威先生）は、一般教育理念に対する鮮明な意識と、「大綱化」から生じているその解消傾向への危惧を、研究と教育との乖離現象および学問の専門化と生活世界・社会的文脈との間の緊張関係の希薄化と重ね合わせて論じ、この問題状況を考える手がかりとして、戦後の「近代主義者」たちの思想と実践を再評価したものである。高度に専門化された研究と、人間形成を事とする教育とがますます重ならなくなってきている現在、この研究と教育の乖離現象を克服する事が一般教育の役割として特に重要であるはずである。一般教育をなくしていく事はこの問題を切り捨てていく事に思われる。切り捨てるのではなくて、人間形成に資する大学教育のあり方を求め、そのあり方に沿う学問思想を尋ねるとき、「近代主義者」たちの学問的スタイルや人となりがひとつの示唆を与える。すなわち、ウェーバー的なエートスに貫かれ彼らの研究は学問的客観的態度を持し、自己の内面に普遍的規範意識を持って自己の生活と行動を律した。そして研究業績自体が教育的意味を有するばかりでなく、新しい世代の教育を重視し、大学外の市民運動にもかかわっていた。

二、三の質疑のほか、大学外部の社会的状況変化からの検討を提起する意見も出かかったが、時

間が少なくて展開できなかった。この報告においても、問題意識と社会科学的認識の理解とに報告者の誠実さがよく現れているのが印象的だった。

「アメリカの大学における一般教育についての紹介」（大分大学　深尾　誠先生）は、アメリカのテキサス・テック大学における一般教育を重視したカリキュラムの実態を、強い関心を以て紹介したものである。テキサス・テック大学は、学生数２万５千人、農業科学、建築、教養、経営、教育、工学、家政、法学、医学の９学部からなる総合大学である。一般教育が重視され、教職員・学生はそれが当然としている。コアカリキュラムの設置を定めた法律をうけて学則において一般教育科目の必修単位数が、５つのコア分野毎に細かく定められている。たとえば、基本的技術のコアでは、Written Communication では６時間、Oral Communication では３時間とか。

質疑・討論で、アメリカの大学の実態を日本の大学にどう翻訳して参考にするかに関心があるように伺われた。報告者の強調点は、カリキュラムが学生の多様な関心に対応し、学習意欲をもたらすように、工夫され・組み立てられていることである。そのような紹介から、報告者のテキサス・テック大学におけるカリキュラムに関して強い関心をもって資料を持ち帰ったことが感じられた。

３つの報告は、一般教育の教育方法、教育理念・思想、カリキュラムと、広く主要な分野をカバーするものであった。そして、大学教育に誠実に取り組んでおり、一般教育に強い関心を持つっていることをも、示すものであった。しかし、このように誠実と関心を持つ教員の存在があっても、現実には一般教育が消失しかねない状況にある。

厚かましく、座長の印象を勝手に述べると、大学教育の状況も一般教育にかかわる諸問題も、教える側のみの検討と取り組みだけでは、扱いきれないという事である。教えを受ける側との相互交流的な検討と、教育体制全体における大学教育と、社会と大学教育との関係も視野に入れた検討とが、問題状況から必要とされているように思われる。とくに、高等学校における教育と大学における一般教育との関係は、問題視される事があっても、抜け落ちざるを得ない。三上先生の教育実践を見習い、佐藤先生の学問思想に共感し、深尾先生が紹介されたようなカリキュラム編成に努力したとしても、教育現場における現在の経験は、一般教育の充実のための手がかりさえ把握できないように思われる。率直に言って、諸問題を検討する別の場の設定と、その場とこの研究協議会との連携が、現状では求められていると考える。

○　自然科学部会報告

〔座　長〕　　大分大学　教授　後藤　勝

自然部会での発表は以下の３件である。

1．基礎教育としての数学教育のあり方　　九州大学　教授　押川元重
2．「化学ばなれ」の現状と課題　　大分大学　教授　川野田実夫
3．教員養成大学における一般物理教育教材について　　大分大学　講師　藤井弘也

数学教育については以前から互いに対立する二つの立場がある。専門領域の学習に必要な数学能力を身につけることと、他の分野の学習のために奉仕するのではなく「数学」そのものを学生に理解させることの二つである。数学を必要とするのは今や理工系だけではない。各分野の教官からそれぞれに数学教育についての要望があることは想像に難くない。これに対して数学教官サイドからは数学は他の専門分野の奴隷ではなく数学そのものをこそ教えるべきであるとして論争は今日尚続いている。押川氏はこのような二者択一の状況は外国語の事情と似ていることを指摘し、さらに使える数学能力と数学的思考能力の両立は可能であるとして、それには数学と他の学問との交流が必要であり、「数学は数学」との立場からの脱却を説いている。あくまでも学生に教えるとの立場から数学教師自身の自己満足を排し、数学が使われている場とそこでどのように使われているかを数学者自身が知ることが大切と指摘している。

学生の化学離れがマスコミで話題になってから久しいが、その原因はいわゆる公害問題にあり、環境汚染が化学工業に多くみられることから化学＝公害との図式が定着し、更に化学の面白さは実験に負う部分が多いのに、高校で実験がなく、学習内容が日常生活の関連がなく受験のための詰め込みに終わっていること、また学生も偏差値によって振り分けられたにすぎないと言った事情が一層化学離れに手を貸している。川野氏は授業はじめ、学期の中間、終了時と数回のアンケートで化学離れの理由を明らかにすると共に、化学に興味を持たない学生も含めて化学の楽しさを理解させるための努力を試みた。今関心の大きい水質汚濁の問題を取り上げ、学生の関心を惹きつけた後で理解に必要な難しい反応式を提示しても学生はしっかりとついて来た。期末のアンケートにも化学に興味が持てるようになったとの肯定的な意見が多かったことから、化学離れは授業のやり方一つで防ぐことができるのではないかと結論している。

今後急激な受験生減少、教員の定員削減、高校生の物理離れなど深刻な事態が予想される中で教員養成学部の物理教育の改善の方向と実践例についての３番目の報告で藤井氏は授業の中で学生に興味を持たせるため、系統的な内容の中でコーヒーブレイク的に身近な話題を取り上げていること、

また時代の要請としてのコンピュータ教育の一例として気柱による共鳴の実験のコンピュータによるデータ処理を取り上げて報告した。

3件の発表に対し活発な質疑応答が交わされたが、その詳細については触れるスペースが無い。ただ物理、化学離れの原因の大きな部分は大学の入試科目を増やすことが事態の改善につながるかどうか議論のある所であろうが今後の検討課題である。

○　外国語部会報告

〔座　長〕　　大分大学　教授　楠本　宏

大学設置基準の大綱化による影響を最も大きく受ける部会の１つということもあってか、外国語部会は50名以上の参加を得て、内容の充実した４つの発表および活発な質疑が行われた。時間の関係から質問希望者の必ずしも全員に応えることができなかったのは、まことに残念であった。

第１の発表「魅力ある外国語教育／学習のために」は、大綱化に伴う初修外国語（ドイツ語）の新カリキュラムに関するものであった。そこでは、まず外国語学習を、単にその運用能力の獲得にあるものとしてではなく、より幅広くとらえ、具体的目標（１．簡単な日常会話、２．基礎的な読解力、３．文化／社会の理解、４．初級文法の外観）を明示し、それに対応したメニューを提供することになる。さらに「全てに全員に」というスタイルをやめて、学習者の意欲に応じたコースメニューの提供も行われる。今後の初修外国語教育の１つの方向性を示すものとして、大変貴重なご提言であった。

第２の発表「改革の中の英語教育」は、いわゆる学生の英語力向上にはどのような工夫が考えられるかという観点からのものであった。その際同時に、内外からの「使える英語」、「しゃべれる英語」を求める声に対しては、明治以来から最近までの絶えることなく続いてきた「教養英語」－「実用英語」論争を踏まえたうえでの、バランスのとれた英語教育の必要性もあることが論じられた。

第３の発表「音読を重視した日本語教育については」は、漢字文化圏に含まれ、文字に頼りがちな中国人、韓国人の日本語能力向上のための実践例の紹介であった。この授業で採用された方法は、最近市販されるようになったカセットブックを利用し、授業中に一人一人に音読させ、さらに内容を理解しているかどうかの質問を行う。さらに、授業の予習、復習の段階でもきめ細かい個別指導が行われる。この授業を可能にしている要素の１つは、少人数（10名程度）クラスである。もちろん、担当者の大変なご努力に支えられていることは言うまでもない。

第４の発表「日本文理大学における外国語教育課程」は、これまであまり問題にされていなかった大綱化を利用した大学経営合理化の実態の報告であった。この大学では、一般教育科目等の履修が合計の単位数指定だけで、完全に自由化された。これによって、一般教育科目等の中で最も人手とコストのかかる外国語の授業の数が減少することは確実である。さらに、授業時間数の減少に対応した形で、他の一般教育科目の担当が奨励されているとの報告もあった。これらの問題は時間の経過とともに、次第により大きな問題となることが予想される。

以上の発表については、時間の関係もあって必ずしも十分な論議を深めることができなかったのは残念であった。提起された様々な問題については、息の長い論議・検討を続ける必要があろう。

○　保健体育部会報告

〔座　長〕　　大　分　大　学　　助教授　　小　池　保　雄

保健体育部会では14の大学・短期大学から22名の参加者があり、２つの発表が行われた。また、出席の先生方からは各大学で進めている新カリキュラムについて話題提供をして頂き、質疑を行った。以下に発表内容の概要を報告する。

大分県立芸術文化短期大学　洲　雅明先生は「大学生の一般的価値観とスポーツ意識」と題し、大学生がスポーツをどのような面に期待をして行っているかを明らかにしようとする目的からアンケート調査を行い、その結果について報告された。調査対象は大分市内の大学生455名、一般社会人1191名の調査結果が得られ、調査内容は個人的属性（性、年齢、職業、休日、ゆとり、世帯構成）や、スポーツ実施（体力、実施の有無、経費）に関する項目、またスポーツに対する便益期待（スポーツする者にとって利益になること）の３項目であり、①大学生と一般、②大学生男、女についての比較結果が報告された。そして、この報告が一般教育改革に直ちに結びつくものではないが、今、実施している大学体育で、あるいは課外活動分野で役立てたいということで総括された。

「大分大学における一般体育再編成の現状～身体・スポーツ科学の方法～」と題する大分大学の古城建一先生の発表は、平成６年度から新カリキュラム移行に伴い、現在準備を進めている（１）教養課程全般の改革の骨子、（２）保健体育再編成の概要についての報告であった。（１）では従来学部別に実施していた一般教育等の授業を原則としてすべてオープン化する。そのための方策として現在、３学部共通の〈時間割、講義題目、単位認定方法、１単位当たり時間数〉について検討中であること。（２）保健体育再編成について従来と変わる点：①科目名称の変更　保健体育から身体・スポーツ科学へ、②授業方法では、保健体育講義・実技を区別せず演習形式（半期30時間；15週完結制）で実施する。そのため、独立した講義は廃止される。その代替として一般教養科目のなかの自然及び社会分野に選択必修として開設する。講義題目は「現代社会と健康・体力」、「現代社会とスポーツ」その他を予定している。③身体・スポーツ科学の概要　必修と選択を設け、それぞれ「身体・スポーツ科学Ⅰ」及び「身体・スポーツ科学Ⅱ」とする。この場合、卒業要件にカウントできる単位数は２単位までとする（必修とあわせて４単位まで）。

また、先生はこの数年、理論と実技の有機的関連を持たせての指導実践事例についても触れられた。特に水泳の授業では学生に観察ノートを所持させ、その解決に向けての教師の助言が記入されるなど質の高い授業の様子がうかがえた。

○　短期大学連絡協議会報告

〔座　長〕　　大分県立芸術文化短期大学　　教　授　　貞　包　博　幸

本年度の短期大学連絡協議会は加盟大学17校のうち出席予定校は13校、うち10校16名が参加した。

昨年度は長沼庄司氏の「鹿児島短期大学における一般教育科目の改定」についての発表、アンケート調査の報告等もあり、都合３日間にわたって同協議会が開催されたもようであるが、本年度は例年どおり１日間だけの開催となった。

議題としては昨年度の主要議題「短期大学一般教育のカリキュラム」を継承し、本年度の全体協議会の統一テーマ「改革のなかの一般教育」を念頭に置きつつ、とりわけ一般教育の開講科目を専門教育との関連においてどのように改定すべきかについて意見を交わし合った。というのも短期大学においてはいままさに４年制大学と同様、平成３年６月の短期大学設置基準の改定にともなって従来の一般教育のあり方を専門教育との関連において抜本的に見直す必要にせまられているからであり、しかもこの問題は近い将来の人口減（受験生減）にそなえて４年制大学への移行を真剣に考えている短期大学も少なからず存在しているため、いまや緊要の課題と目されたからであった。

この点では座長の私が現在所属している大分県立芸術文化短期大学の場合もその例外ではないし、しかもちょうどさいわいにも目下懸案となっている四年制芸術大学移行との絡みで、つい最近当大学でも一般教育改定のための検討作業を終えたばかりのところであった。

そこで今回は座長の私が当番校としての立場からわが大学の事例をひとまず報告し、しかるのちに討議するという形で会議を進行した。以下はその報告の概要である。

●　一般教育改革の考え方について

まず一般教育は従来学校教育法の趣旨に沿いながら幅広い知識を授けることによって知的・道徳的教育の役割の一端をにないつつ一定の教育成果をあげてきたことについて言及した。

しかし時代は大きく変わり、国際間の人びとの交流が増すとともに多種多様な価値観が人びとの生き方を支配するようになって大学教育にも大きな変革が求められるようになったことを述べ、またこのためにはそれぞれの大学が個性を培い、自らのアイデンティティをもつことが必要である点について言及した。そしてこのためには一般教育はこれまでの教育を発展的に解消し、美的・音楽の専門教育との関連を密にすることによって、専門教育の一端をになえるようカリキュラムを改定することが必要であるとの指摘をおこなった。

●　カリキュラムについて

絵画・彫刻・デザインや楽器・声楽等の活動にとって実技の向上は必要不可欠な課題であり、美術の制作や音楽の演奏はこのうえに成り立っていること、しかし実技はそれ自体としては美術表現

のための技術的手段にほかならないことを指摘し、このような実技を芸術の名にふさわしいものへと高めるもの、見るもの・聞くものに快い感動をあたえ、実技に芸術的な価値を付与するものは根本において実技の奥にひそむ表現内容である点を述べた。

そしてこのような表現内容を培うための教育が広い意味での理論教育であり、このための基礎素養として人や自然、社会や文化、歴史等の幅広い知識の修得が必要不可欠であること、またこれから制作者や演奏者を目指そうとする者はこうしたものに対し常に関心を抱き、自分なりの考え方をもち、そしてそれを表現できる個性・独創性を身につけなければならない、ことを指摘した。

- 具体的カリキュラムのための留意点

人文・社会・実技・体育・外国語といった旧来の設置基準の枠に縛られた一般教育のカリキュラムを改め、以上のような教育目的を達成するためおのおのの学科目を各学科の教育内容の実情に応じ、必須科目・自由選択科目に指定するが、学生が必要に応じ、興味をもったときに履修できるように、多くの科目を自由選択とし、履修年次も定めない。また旧来の一般教育・専門教育の枠にとらわれない教育の連続性・一貫性をめざす。

以上が私の報告の概要であった。以上のように実技を専門とした芸術系大学の場合には一般の大学とは異なった特殊性があることを否めないものの、短期大学のなかには現在音楽科等を附設しているところも多いし、また芸術教育の場合には一般教育が専門教育に対してもっている意義や役割がかえって鮮明にあらわれるという側面もあるため、一般大学の参加者にとっても大いに参考になったものと思う。

こののち各短期大学の一般教育カリキュラムの現状とそれぞれの大学における改革への取り組み等についてほぼ2時間にわたって意見を交換し合ったが、この点については昨年度の報告にも若干触れられているしまた紙面の関係もあるので、ここでは割愛する。ただ最後に締めくくりとして昨年度冒頭に示したような発表をおこなった長沼庄司（鹿児島短期大学）氏が一般教育には一般教育としての理念をもつことが必要である、と述べられたことを付け加えておきたい。